

集合住宅居住者の心理特性

—居住環境と援助行動・援助の規範意識について—*

加藤義明**・松井 豊***

要 約

多摩・奄美・青山の3地区の集合住宅及び一戸建居住者の意識調査から、援助行動や援助に関わる規範意識と居住環境との関連を検討することが、本研究の目的である。調査対象は、加藤及び本間の「集合住宅居住者の心理特性」と同一で、上記3地区に居住する主婦653名である。

結果は4つの仮説に従って分析された。主な結果は以下のとおりである。

1. 援助行動には地域差が著しくみられ、奄美地区の主婦は他地区の主婦より、援助をよく行う。しかし、一般的な援助規範には地域差がなく、非関与の規範意識に地域差がみられた。
2. 非関与の規範意識は、一般的な援助規範と負の相関を示し、援助行動を行わない者ほど非関与の意識が強い、という関連がみられた。
3. 居住する建物が、集合住宅か一戸建かという住居形態、建物の高さ、部屋の数は、援助行動や規範意識とは関連していない。
4. 居住する地域の安全性意識は、非関与の規範意識と相関するが、援助行動とは関連しない。

はじめに

我々は、一連の研究^{注1)}で、集合住宅居住者の心理特性を分析してきたが、本研究では援助行動 (helping behavior) 及び援助に関わる規範意識をとりあげ、居住環境との関わりを中心に検討する。

援助行動は、自分への外的な報酬を期待せず、他者の利益を増大させる、自発的な対人行動と定義される (Bar-Tal, 1976参照)。日常生活の言葉で表現すれば、親切・救助・人助け・相互扶助などが、援助行動に含まれている。近年、援助行動は心理学者の関心を集めており、社会心理学や発達心理学の分野において、規定因や獲得機序に関する研究が増えつつある。

援助行動の規定因は様々な形で研究されているが、居住環境に関連する要因は、都市化や都会生活に内在する諸変数を中心に検討したものが多く、そこで、都市化と援助行動とのかかわりを扱った研究を、以下で概観する。

援助行動に及ぼす都市化の影響を分析する場合に、最もよく用いられる手法は、人口規模の異なる諸地域において、援助行動の生起を測定する方法である。例えば、Korte & Kerr (1975)は、ボストンと西マサチューセッツの2地点で、援助行動 (道に落ちていた投函されていない葉書を、拾って投函する行動など) を測定し、都市 (ボストン) の方が援助の生起率が低い、と報告している。他に、Merrens (1973)、Kammann *et al.* (1979)、House & Wolf (1978)、Franklin (1974) も、同様の結果を得ている。しかし、Forbes & Gromoll (1971)、Lesk & Zippel (1975)、Lowe & Ritchey (1973)、Korte *et al.* (1975) らは、都市と非都市との間に、有意な差を認めていない。こうした結果の不一致は、研究の対象となった個々の地点や被験者が、その地域に典型的な都市的 (又は非都市的) な環境的特徴を、必ずしも保有していない事によって、生じていると考えられる。こうした考え方から、都市の環境的特性を詳細に分析した研究が行われ始めた。これらは6つにまとめられるので、順に

* この論文は、主として松井が企画・分析した。

** 東京都立大学都市研究センター・人文学部

*** 東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程

紹介する。

第1は、対人距離や人の密集に関する研究である。Kammann *et al.* (1979) や、Jorgenson & Dukes (1976)は、援助可能な人の周囲が混雑していると、援助行動が起こりにくい事を示している。Latané & Darley (1970)は、一連の著名な実験によって、緊急を要する援助場面では、居合わせた人が多ければ多いほど、かえって援助行動は起こりにくく、生起が遅くなる事を明らかにし、この現象を傍観者効果 (bystander effect) と命名した。Baron (1978), Konečni *et al.* (1975), Baron & Bell (1976) は、援助を依頼した者と依頼された者との距離の要因を、研究している。

第2は、居住する建築に関する研究である。Bickman *et al.* (1973) は、高層で建物内の人口密度が高い建築に居住する学生は、援助 (仲間のために牛乳の空箱を供出する行動など) が少ない事を示している。Korte (1978) は、従来の諸知見をまとめて、高層アパート建築では、居住者相互の社会的接触が少なくなるので、援助や相互扶助も減少すると考察している。

第3は、都会生活における刺激の量に関する研究である。Milgram (1970) は、都会生活の最大の特徴として、個人が受ける刺激の量の多さを指摘している。都会生活における刺激は、個人が処理しきれないほど多いので、都会人は常に過負荷状態 (overloading) にある。この状態に適応するために、都会人は刺激の遮蔽や順位づけ、非関与の規範 (norm of non-involvement) などの手段を講じなくてはならない。非関与の規範は、他人との積極的な関わりを避けようという規範であるが、この規範は他者からの援助の要求についても、認知(入力)を妨害するので、援助行動の生起を抑制する。以上がMilgramの説で、彼は実証例も提示している。Mathews & Cannon (1975), Page (1977), Sherrod & Downs (1974), Korte *et al.* (1975), Weiner (1976) らは、主に騒音を用いて過負荷状態を作りあげ、刺激が大きくなると、援助行動が減少する事を実証している。

松井・堀 (1978, 1979) は、大学生の援助に関する規範意識の構造を分析し、一般的な援助規範や恩の規範と並んで、非関与の規範^{注2)}が存在することを示している。松井 (1978) は、大学生において、一般的援助規範と恩の規範の意識が強い者ほど、援助傾向が強く、非関与の規範意識が強い者ほど、援助傾向が弱いと報告している。

第4は、時間的余裕や心のゆとりに関連する研究である。Darley & Batson (1973) は、大学構内を移動する時に、時間に追われている者は、道端に人が坐りこんでいるのを見ても、助けようとしないう事を、実証した。西川他 (1978) によると、通勤で急いでいる朝より、時間に追われていない昼や夜の方が、電車のホームにおける援助が起こりやすい。また、松井・嶋村 (1980) による

と、課題に没頭していて心のゆとりの無い時は、援助は低下し、傍観者効果が顕著になる。

第5として、地域の安全性に関する研究がある。House & Wolf (1978) は、犯罪率の増加している地域では、援助が少ない事を示し、地域の安全性や危険性が援助行動の生起に影響すると、述べている。

第6は、上記の諸要因とは若干視点が異なるが、養育された地域に関する研究である。Gelfand *et al.* (1973) は、養育された地域が大きい (都会的である) ほど、援助の生起率が低い事を示し、現在の居住地より、育った地域の要因の方が、援助に強く影響する事を示した。Latané & Darley (1970), 松井・石毛 (1979) も同様の知見を得ているが、Schwartz & Clausen (1970) では、援助と出身地域との間に、何の関連もみられていない。

本研究では、以上の諸知見を踏まえて、集合住宅及び近隣の一戸建の居住者の意識調査の結果から、居住環境と援助行動や規範意識との関連を明らかにする事を目的とする。仮説は以下の4点である。

H₁ (地域差); 援助行動や規範意識は、居住地域によって異なり、都市化の進んだ地域では、援助行動が少なく、非関与の規範意識が強い。

H₂ (援助行動と規範との関連); (大学生と同様に) 主婦においても、援助行動は規範意識と関連し、非関与の規範意識は、援助行動や一般的援助規範を抑制する。

H₃ (建物の構造による差); 居住する建物が、集合住宅か否か、高層建築であるか否か、一戸建では部屋数が多いか否か、という変数によって、援助行動や規範意識が異なる。

H₄ (安全性意識との関連); 居住地域の安全性を高く評価している人は、援助行動が多く、規範意識も強い。

方 法

本研究は、集合住宅居住者に関する一連の研究の一部を成しており、データは加藤 (住み心地要因の分析)・本間 (居住環境と対人関係) と同一のものである。方法の詳細は加藤に紹介されているので、ここでは概略だけを述べる。

(1) 調査対象 多摩ニュータウン地区、奄美佐大熊地区、青山地区の集合住宅及び、各集合住宅近隣の一戸建に在住する主婦、計653名。

(2) 実施方法 多摩と青山地区は、調査員の訪問留置法で、郵送回収した。奄美地区は、地元小学校に依頼し、教師、児童を通じて、主婦に配布、回収した。

(3) 本研究で分析する項目

a. 援助行動 文章によって援助を必要とする場面を提示し、その場で回答者がとるであろう行動を、反応選択肢

の中から選ぶ場面想定法(松井・石毛, 1978)を採用した。提示した場面は、

「A. 夜、道ばたにうづくまっている男の人をみかけました」(以下「夜道の援助」と略す)

「B. スーパーで女の人を盗んだように見えました」(以下「盗みを見る」)

「C. 以前、小銭をたてかえてくれた近所の人、ちょっとした募金にやってきました」(以下「募金の要請」)

「D. 眼の不自由な人がホームで電車に乗ろうとしています、周囲の人は手をかそうとしません」(以下「ホームの盲人」)

である。反応選択肢は各々、援助・様子を見る・非援助などから、構成されている(加藤の付録アンケート用紙参照、以下同)。

b. 援助の規範意識 松井・堀(1978, 1979)に基づき、非関与の規範から、

「①他人とはすすんで知り合いになるべきである」(逆転項目、以下「人と知り合いに」と略す)

一般的援助規範から

「②不当な境遇に苦しんでいる人には たすけを与えるべきである」(以下「苦しむ人を助けよ」)

恩の規範から

「③“恩”という考えは時代遅れだと思う」(逆転項目、以下「恩は時代遅れ」)

の計3項目^{注3)}をとりあげ、それぞれ「非常に賛成」から「非常に反対」までの7件法で、回答を求めている。

c. 建物の構造に関する項目 居住している建物が、集合住宅か一戸建かという住居形態、集合住宅では建物の高さ、一戸建では台所を除いた部屋の数の3項目を、とりあげる。

d. 地域の安全性意識に関する項目 団地のイメージ、一戸建のイメージを Semantic Differential 尺度(5件法)で測定しており、その中から「安全な-危険な」の尺度をとりあげる。また、現在の住いの満足度(満足から不満足までの5件法)の評価から、「防犯の安全性について」の評価をとりあげる。

(4) 実施時期 多摩地区1979年8月、奄美地区同年10月、青山地区1980年10月。

結果と考察

(1) 地域差について

地域別・住居形態別に、援助行動の回答の分布をみたのが、表1~表4である。

「A. 夜道の援助場面」における集合住宅居住者の回答をみると(表1)、多摩地区では「様子を見る」が多く(44%)、奄美地区では他の地域に比べて、「声をかける」「人を呼ぶ」の比率が高く、「何もしない」比率が

表1 地域別・住居形態別の援助行動(A. 夜道の援助)
(単位は%)

		N	声をかける	人を呼ぶ	様子を見る	何もしない
集合住宅	多摩	221	14.9	22.6	43.9	18.6
	奄美	89	20.2	41.6	33.7	4.5
	青山	60	10.0	38.3	31.7	20.0
一戸建	多摩	90	14.4	32.2	37.8	15.6
	奄美	106	19.8	35.8	34.0	10.4
	青山	65	12.3	46.2	36.9	4.6

注1) 本研究に掲げた表は全て、NAを除いてある。

注2) 地域差の検定……集合住宅 $\chi^2=23.84$, $df=6$, $P<.01$. 一戸建 $\chi^2=8.14$, $df=6$, $P>.10$. 住居形態差の検定……多摩 $\chi^2=3.22$, $df=3$, $P>.10$. 奄美 $\chi^2=2.59$, $df=3$, $P>.10$. 青山 $\chi^2=7.00$, $df=3$, $P<.10$.

表2 地域別・住居形態別の援助行動(B. 盗みを見る)
(単位は%)

		N	注意する	店の人を捜す	店の人がいたら知らせる	何もしない
集合住宅	多摩	220	5.0	14.5	33.6	46.8
	奄美	89	13.5	13.5	49.4	23.6
	青山	58	6.9	20.7	44.8	27.6
一戸建	多摩	90	8.8	18.7	44.0	28.6
	奄美	105	14.3	19.0	41.0	25.7
	青山	65	6.2	9.2	41.5	43.1

注) 地域差の検定……集合住宅 $\chi^2=23.14$, $df=6$, $P<.01$. 一戸建 $\chi^2=9.93$, $df=6$, $P>.10$. 住居形態差の検定……多摩 $\chi^2=9.25$, $df=3$, $P<.05$. 奄美 $\chi^2=1.78$, $df=3$, $P>.10$. 青山 $\chi^2=4.90$, $df=3$, $P>.10$.

表3 地域別・住居形態別の援助行動(C. 募金の要請)
(単位は%)

		N	募金する	考えるか断わる
集合住宅	多摩	222	27.9	72.1
	奄美	88	54.5	45.5
	青山	62	37.1	62.9
一戸建	多摩	92	29.3	70.7
	奄美	106	52.8	47.2
	青山	66	21.2	78.8

注) 地域差の検定……集合住宅 $\chi^2=19.49$, $df=2$, $P<.01$. 一戸建 $\chi^2=20.81$, $df=2$, $P<.01$. 住居形態差の検定……多摩 $\chi^2<1.0$. 奄美 $\chi^2<1.0$. 青山 $\chi^2=3.92$, $df=1$, $P<.05$.

表4 地域別・住居形態別の援助行動(D.ホームの盲人)
(単位は%)

		N.	すすんで 手をかす	様子を見る 何もしない
集合住宅	多摩	223	33.2	66.8
	奄美	88	54.5	45.5
	青山	62	33.9	66.1
一戸建	多摩	92	31.5	68.5
	奄美	106	45.1	54.9
	青山	66	30.3	69.7

注) 地域差の検定……集合住宅 $\chi^2=12.80$, $df=2$, $P<.01$. 一戸建 $\chi^2=5.32$, $df=2$, $P<.10$. 住居形態差の検定……多摩 $\chi^2<1.0$. 奄美 $\chi^2=1.68$, $df=1$, $P>.10$. 青山 $\chi^2<1.0$.

低い(5%)。地域差の検定 (χ^2 検定) によると, 地域差は有意である。一戸建居住者においては, 青山地区で, 「人を呼ぶ」の比率が高く(46%), 「何もしない」比率が低い, 地域差の検定は, 有意ではない。

「B. 盗みを見る」場面の回答をみると(表2), 集合住宅居住者では, 多摩地区で「何もしない」比率が高く, 奄美・青山地区では「店の人が近くにいたら知らせる」比率が高い。奄美地区では「その人に声をかけて注意する」の比率も高めである。一戸建居住者でも, 奄美地区では「注意する」比率が高い。検定の結果では, 集合住宅においてのみ, 地域差が有意であった。

「C. 募金の要請」場面は, 「断わる」と回答した人が, 全体で8名(1.2%)しかいないので, 「考える」と回答した人と合わせて分析した(表3)。集合住宅・一戸建ともに, 奄美地区は他の地区に比べて, 「募金する」と回答した人が多い。検定の結果は, 集合住宅・一戸建ともに, 地域差が有意である。

「D. ホームの盲人」場面は, 「何もしない」と回答した人が4名(0.6%)しかいないので, 「様子を見る」の回答と合わせて分析した(表4)。この場面の回答の分布は, C場面と類似しており, 奄美地区で「すすんで手をかす」比率が高く, 多摩・青山地区で低くなっている。検定の結果, 集合住宅居住者においてのみ, 地域差が有意であった。

次に, 地域別・住居形態別に, 援助規範の平均値を算出した結果を表5に示し(得点化の方法は表5の注を参照), 表5の検定結果を表6にまとめた。「①人と知り合いに」の意見には, 集合住宅・一戸建居住者とも, 奄美地区の賛成度が高く(集合住宅 $\bar{X}=5.12$, 一戸建 $\bar{X}=5.08$), 多摩地区・青山地区は低い($\bar{X}=4.1\sim 4.4$)。検定結果(表6)は, 集合住宅・一戸建ともに有意である。

表5 地域別・住居形態別の援助規範の平均注1)と標準偏差注2)

		統計量	①人と知り 合いに	②苦しむ人 を助けよ	③恩は時代 遅れ
集合住宅	多摩	N \bar{X} SD	220 4.41 1.05	222 5.37 0.98	220 3.00 1.67
	奄美	N \bar{X} SD	90 5.12 1.12	89 5.61 1.20	88 3.40 2.06
	青山	N \bar{X} SD	60 4.13 1.22	60 5.39 0.96	59 2.37 1.24
一戸建	多摩	N \bar{X} SD	89 4.30 1.02	90 5.50 1.03	91 3.33 1.97
	奄美	N \bar{X} SD	106 5.08 1.11	105 5.69 1.18	105 3.40 2.23
	青山	N \bar{X} SD	64 4.27 1.03	63 5.46 1.01	63 2.87 2.06

注1) 「非常に賛成」を7点「かなり賛成」を6点と順に配点し, 「どちらでもない」を4点, 「非常に反対」を1点として得点化した。(以下同)

注2) 本研究で表記されるSDは全て標準偏差の不偏推定値である

「③恩は時代遅れ」の意見には, 青山地区で反対する人が多い。一方, 「②苦しむ人を助けよ」という一般的援助規範には, 地域差がみられない($\bar{X}=5.3\sim 5.7$)。

以上の結果をまとめると, 援助行動の回答には地域差が著しく, 奄美地区は多摩・青山地区より, 援助を行う比率が高い。しかし, 一般的援助規範には地域差がみられず, 非干渉の規範意識が奄美地区で弱い事が明らかになった。ところで, 本間の研究でも論じられているように, 奄美地区は鹿児島県の島部に位置し, 東京近郊の多摩地区や, 都心の青山地区に比べて, 都市化の程度は低いと考えられる。そこで, 本研究は, 都市化の進んだ地域では, 非干渉の規範が強く, 援助行動が抑制されるというMilgram(1970)の知見と一致しているといえよう。援助行動や規範意識には地域差があるという仮説H₁は, ほぼ支持された。ただし, 地域差は一戸建居住者より集合住宅居住者で, 顕著に現われている。

表 6 援助規範の地域差・住居形態差の検定結果

地域差	住居形態差	統計量	①	②	③
			人と知り合いに	苦しむ人を助けよ	恩は時代遅れ
地域差	集合住宅	F	18.36**	1.74	6.33**
		df	2,367	2,368	2,364
住居形態差	一戸建	F	17.38**	1.10	1.35
		df	2,256	2,255	2,256
住居形態差	多摩	t	<1.0	1.05	1.50
		df		310	309
	奄美	t	<1.0	<1.0	<1.0
	df				
	青山	t	<1.0	<1.0	1.64
	df				103

注) **P<.01

表 7 援助行動 (A. 夜道の援助) の反応別の援助規範の平均と標準偏差

反応	統計量	集合住宅全体			一戸建全体		
		①人と知り合いに	②苦しむ人を助けよ	③恩は時代遅れ	①人と知り合いに	②苦しむ人を助けよ	③恩は時代遅れ
声をかける	N	55	55	56	40	41	42
	\bar{X}	5.01	5.82	2.91	4.77	5.75	3.61
	SD	1.19	0.97	1.88	1.25	1.15	2.29
人を呼ぶ	N	107	107	104	95	95	97
	\bar{X}	4.65	5.52	2.90	4.63	5.49	3.25
	SD	1.16	1.04	1.70	1.11	1.13	2.17
様子をみる	N	146	145	144	93	91	91
	\bar{X}	4.48	5.36	3.10	4.62	5.64	3.16
	SD	0.96	0.97	1.74	1.12	0.94	2.10
何もしない	N	54	55	55	28	28	27
	\bar{X}	3.96	5.05	3.01	4.25	5.25	2.96
	SD	1.28	1.04	1.63	1.00	1.23	1.53
検定の結果	F	8.71**	5.84**	<1.0	1.25	1.51	<1.0
	df	3,358	3,359		3,252	3,251	

注) **P<.01

(2) 援助行動と規範意識との関連

援助行動の反応別に回答者を群分けし、各群の規範意識の値を算出し、1要因の分散分析で群差を検定した結果が、表7～表10である。

「A. 夜道の援助」場面では(表7)、集合住宅居住者において、①と②に有意差がみられる。すなわち、倒れ

表 8 援助行動 (B. 盗みを見る) の反応別の平均と標準偏差

反応	統計量	集合住宅全体			一戸建全体		
		①人と知り合いに	②苦しむ人を助けよ	③恩は時代遅れ	①人と知り合いに	②苦しむ人を助けよ	③恩は時代遅れ
注意する	N	26	26	26	27	26	27
	\bar{X}	5.50	5.61	3.38	5.25	6.07	3.40
	SD	1.17	1.23	2.13	1.05	0.93	2.27
人を捜す	N	55	54	54	42	41	43
	\bar{X}	4.72	5.81	2.75	4.59	5.48	3.34
	SD	0.87	0.97	1.88	1.03	1.26	2.20
いたら知らせる	N	142	141	138	109	108	108
	\bar{X}	4.53	5.41	3.02	4.59	5.51	3.39
	SD	1.12	0.91	1.70	1.14	0.99	2.04
何もしない	N	136	139	138	79	81	78
	\bar{X}	4.28	5.23	3.02	4.44	5.48	2.84
	SD	1.15	1.10	1.62	1.09	1.13	2.00
検定の結果	F	9.47**	4.40**	<1	3.71*	2.23†	1.22
	df	3,355	3,356		3,253	3,252	3,252

注) **P<.01, *P<.05, †P<.10

表 9 援助行動 (C. 募金の要請) の反応別の平均と標準偏差

反応	統計量	集合住宅全体			一戸建全体		
		①人と知り合いに	②苦しむ人を助けよ	③恩は時代遅れ	①人と知り合いに	②苦しむ人を助けよ	③恩は時代遅れ
募金を考える	N	131	132	131	96	95	96
	\bar{X}	4.70	5.53	2.96	4.79	5.63	3.41
	SD	1.21	1.02	1.73	1.22	1.13	2.22
断わる	N	236	236	233	163	163	163
	\bar{X}	4.44	5.35	3.00	4.50	5.52	3.14
	SD	1.10	1.03	1.74	1.05	1.06	2.02
検定の結果	F	4.40*	2.40	<1.0	4.03*	<1.0	<1.0
	df	1,365	1,366		1,257		

注) *P<.05

ている人に声をかけるなど、援助を行う層ほど、一般的援助規範意識が強く、非干渉の規範意識は弱い。一戸建居住者にも同様の傾向がみられる。

「B. 盗みを見る」場面では(表8)、集合住宅居住者において、①と②に有意な差がみられる。何もしない層は、非干渉の規範意識が強く、一般的援助の規範意識が

表 10 援助行動 (D. ホームの盲人) の反応別の平均と標準偏差

反応	統計量	集合住宅全体			一戸建全体		
		①人と知り合いに	②苦しむ人を助けよ	③恩は時代遅れ	①人と知り合いに	②苦しむ人を助けよ	③恩は時代遅れ
手をかす	N	140	141	141	92	93	95
	\bar{X}	4.74	5.71	2.89	4.98	5.63	3.08
	SD	1.23	1.02	1.78	1.24	1.15	2.16
様子見・何もしない	N	228	228	224	163	161	160
	\bar{X}	4.41	5.24	3.06	4.39	5.52	3.30
	SD	1.08	1.01	1.71	0.97	1.04	2.03
検定の結果	F	7.28**	18.69**	<1.0	17.51**	<1.0	<1.0
	df	1,366	1,367		1,253		

注) **P<.01

弱い。注意をする層は逆の結果になっている。人が近くにいたら知らせるという層は、前2層の中間に位置しているが、店の人を捜すという層は、一般的援助の規範意識が特に強い。なお、一戸建居住者では、①においてのみ有意な差がみられている。

「C. 募金の要請」場面では (表9)、集合住宅居住者においては、①が関連を示し、募金する層の方がしない層より、非干渉の規範意識が弱い。「D. ホームの盲人」場面 (表10) では、①と②に関連がみられ、すすんで手をかす層は、かさない層に比べて、非干渉の規範意識が弱く、一般的援助の規範意識が強い。一戸建居住者においては、C・D場面とも、①についてのみ有意な差がみられる。

次に、規範意識の相互の相関係数を、表11に示した。集合住宅・一戸建ともに、非干渉の規範 (④逆転項目) と、一般的援助規範 (⑧) との間に、高い正の相関がみられる。また、集合住宅居住者では、②と「③恩は時代遅れ」が負に相関している。

以上の結果をまとめると、一般的援助規範 (⑧) は、C場面を除く3つの援助場面と有意に関連し、積極的に援助する人ほど、規範意識が強い。C場面で関連がみられない理由は、この場面が他の場面と異なり、単純な援助ではなく、互恵的相互的な色合いが濃い援助場面 (Bar-Tal, 1976) であるため、と考えられる。

非関与の規範 (①) は、全ての援助場面と有意に関連し、一般的援助の規範意識とも強く相関している。非関与の規範意識が強い人ほど、援助行動を行わず、援助の規範意識も低い。この結果は、Milgram(1970)の知見と一致している。

恩の規範 (③) は、援助行動と全く関連を示さず、大

表 11 援助規範の相互相関

	集合住宅全体		一戸建全体	
	②苦しむ人を助けよ	③恩は時代遅れ	②苦しむ人を助けよ	③恩は時代遅れ
①人と知り合いに	.288** (367)	.030 (363)	.359** (255)	.021 (254)
②苦しむ人を助けよ		-.129** (365)		-.036 (254)

注1) かつこ内は有効標本数

注2) **P<.01,

学生から得られた結果 (松井, 1978) との間に、くいちがいが見られる。大学生の恩意識と主婦の恩意識は、構造が異なるためと考えられるが、差異の内容を検討するには、今後の研究が必要である。

このように、恩の規範を除いて、規範意識は援助行動と関連を示すという、仮説 H₂ はほぼ支持された。しかし、一戸建居住者は集合住宅居住者に比べると、規範と行動との関連が弱い傾向がみられる。

(3) 建物の構造との関連

まず、居住している建物の形態が、集合住宅か一戸建かによって、援助行動の回答の比率に差が現われるか否か、を分析する (表1~表4参照)。4場面・3地区のうち、住居形態差が有意であるのは、2つだけである。多摩地区の「B. 盗みを見る」場面では、集合住宅居住者の方が、何もしない比率が高い。青山地区の「C. 募金の要請」では、集合住宅居住者の方が、募金する比率が高い。また、住居形態と援助規範との関連をみると (表5, 表6)、いずれの規範・いずれの地域においても、差はみられない。

次に、多摩地区の集合住宅 (ニュータウン) について、建物の高さに基づいて、回答者を中層 (5階建) 群と高層 (11階建) 群とに分け、各群の援助行動 (表12) と規範意識 (表13) を分析した。表に示されるとおり、どの回答にも、建物の高さによる差はみられない。

さらに、一戸建居住者について、住いの部屋の数と、援助行動 (表14) や規範意識 (表15) との関連を分析した。表14は、援助行動の反応別に回答者を群分けして各群の部屋数の平均と標準偏差を示している。4場面のうちで、有意差がみられるのは、「C. 募金の要請」だけであり、募金をする人の方がしない人より、部屋数が少ない。また、表15は部屋数と援助規範との相関係数を示している。相関が有意であるのは、奄美地区の「①人と知り合いに」、一戸建全体と青山地区の「③恩は時代遅れ」だけであり、一般的援助規範 (⑧) はどの地区でも、

表 12 多摩ニュータウンにおける
建物の高さ別の援助行動 (単位は%)

A 夜道の援助 $\chi^2 < 1.0, df = 3$					
	N	声をかける	人を呼ぶ	様子を見る	何もしない
中層	115	13.0	23.5	43.5	20.0
高層	106	17.0	21.7	44.3	17.0
B 盗みを見る $\chi^2 = 4.19, df = 3$					
	N	注意する	人を捜す	いたら知らせる	何もしない
中層	114	6.1	16.7	36.8	40.4
高層	106	3.8	12.3	30.2	53.8
C 募金の要請 $\chi^2 < 1.0, df = 1$					
	N	募金する	考える・断わる		
中層	115	26.1	73.9		
高層	105	30.5	69.5		
D ホームの盲人 $\chi^2 < 1.0, df = 1$					
	N	手をかす	様子見・何もしない		
中層	118	34.7	65.3		
高層	105	31.4	68.6		

注) 検定の結果はいずれも有意でない。

表 13 多摩ニュータウンにおける建物の高さ別の
援助規範の平均値と標準偏差

	統計量	① 人と知り合いに	③ 苦しむ人を助けよ	② 恩は時代遅れ
中層	N	118	117	117
	\bar{X}	4.41	5.46	3.04
	SD	1.05	1.01	1.83
高層	N	102	105	103
	\bar{X}	4.41	5.27	2.95
	SD	1.06	0.94	1.46
検定の結果 ^{注)}	t	<1.0	1.48	<1.0
	df		220	

注) 検定の結果はいずれも有意でない。

表 14 一戸建全体における援助行動の反応別の
部屋数の平均と標準偏差

A 夜道の援助 $F = 1.66, df = 3, 217$				
	声をかける	人を呼ぶ	様子を見る	何もしない
N	32	88	76	25
\bar{X}	4.25	4.94	4.84	5.16
SD	1.70	1.72	1.74	1.57
B 盗みを見る $F < 1.0, df = 3, 218$				
	注意する	人を捜す	いたら知らせる	何もしない
N	23	38	93	68
\bar{X}	4.52	4.92	4.73	5.05
SD	1.56	1.90	1.68	1.70
C 募金の要請 $F = 5.73^*, df = 1, 221$				
	募金する	考える・断わる		
N	80	143		
\bar{X}	4.47	5.04		
SD	1.60	1.74		
D ホームの盲人 $F < 1.0, df = 1, 218$				
	手をかす	様子見・何もしない		
N	78	142		
\bar{X}	4.91	4.78		
SD	1.71	1.71		

注) *P < .05

表 15 一戸建の部屋数と援助規範との相関係数

	① 人と知り合いに	② 苦しむ人を助けよ	③ 恩は時代遅れ
一戸建全体	.013 (221)	.100 (218)	-.121* (219)
多摩	-.045 (78)	.003 (78)	-.081 (78)
奄美	.223* (85)	.166 (84)	.030 (84)
青山	.110 (58)	.153 (56)	-.276* (57)

注1) カッコ内は有効標本数

注2) *P < .05

有意な相関を示していない。

以上の結果をまとめると、住居形態、建物の高さ、部屋の数の変数は、一般的に援助行動や援助規範との関連が薄く、仮説 H₃ は支持されなかった。高層集合住宅では援助が低下するという Korte(1978)の予想は、多摩地区のB場面で実証されたが、青山地区のC場面では、予想と全く逆の結果になっている。

(4) 安全性意識との関連

まず、集合住宅居住者の団地の安全性イメージ、一戸建居住者の一戸建の安全性イメージ、両者の防犯の安全性の満足度の3変数について、援助行動の反応別に回答者を群分けし、各群の得点の平均値を算出し(得点化の方法は表16の注1、注2参照)、1要因の分散分析を行った。集合住宅・一戸建を通じて、3変数・4場面のうち有意な差が現われたのは、2つだけであった。即ち、一戸建において、「D. ホームの盲人」に手をかす層は、かさない層に比べて、一戸建を安全と評価し、防犯の安全性に満足している(表16参照)。

次に、安全性意識の3変数と援助規範との相関係数を算出した。結果は表17のとおりである。集合住宅・一戸建ともに、防犯の安全性の満足度と「①人と知り合いに」が正の相関を示している。集合住宅居住者においては、防犯の安全性の満足度と「②苦しむ人を助けよ」が負の相関を示し、団地の安全性イメージと「③恩は時代遅れ」も負の相関を示している。

以上の結果をまとめると、安全性意識のうち、防犯の安全性の不満は非関与の規範と相関し、防犯上の安全性に不満をもっている人は、他人とかかわろうとしない傾向がある事が、明らかにされた。しかし、安全性意識は援助行動とは、ほとんど関連せず、集合住宅では一般的

表 16 一戸建全体における援助行動(D. ホームの盲人)別の安全性意識の平均と標準偏差
一戸建の安全性イメージ注1) F=3.99* df=1,240

	手をかす	様子見・何もしない
N	91	151
\bar{X}	4.00	3.73
SD	0.96	1.01

防犯の安全性の満足度注2) F=5.03*, df=1,253

	手をかす	様子見・何もしない
N	92	163
\bar{X}	3.48	3.14
SD	1.14	1.18

注1) 「危険」を1点、「やや危険」を2点、「どちらでもない」を3点、「やや安全」を4点、「安全」を5点として得点化した。(団地の安全性イメージも同様)

注2) 「不満」を1点、「やや不満」を2点、「どちらでもない」を3点、「やや満足」を4点、「満足」を5点として得点化した。

注3) *P<.05

援助規範と負の相関を示している。よって、地域の安全性意識が援助の行動や規範意識に結びつくという仮説 H₄ は支持されなかった。

(5) 全体的考察

本研究の4つの仮説のうち、援助の地域差(H₁)及び規範と行動との関連(H₂)は、支持され、いずれの結果も、都市化と非関与の規範について論じたMilgram(1970)の

表 17 安全性意識注1) と援助規範との相関係数

	集合住宅全体			一戸建全体		
	① 人と知り合 いに	② 苦しむ人を 助けよ	③ 恩は時代遅れ	① 人と知り合 いに	② 苦しむ人を 助けよ	③ 恩は時代遅れ
団地の安全性イメージ	.046 (350)	-.000 (352)	-.162** (348)			
一戸建の安全性イメージ				.058 (240)	-.009 (239)	.019 (241)
防犯の安全性の満足度	.102* (362)	-.123** (364)	-.069† (359)	.178** (254)	.075 (253)	-.013 (255)

注1) 得点化の方法は表16の注1・注2参照

注2) カッコ内は有効標本数

注3) **P<.01, *P<.05, †P<.10

知見を支持していた。一方、建物の構造による差(H₃)及び安全性意識との関連(H₄)の2つの仮説は、ほとんどの結果が支持していない。これは、援助行動や規範が、居住する建物や地域の安全性という物理的な環境より、地域の文化や周囲の人間関係といった、文化的心理的な環境に左右される事を示しているのではないだろうか。

ただし、本研究は質問紙調査のデータに基づいて分析されており、結果の一般化には慎重でなくてはならない。なぜなら、質問紙調査においては、反応が社会的望ましき(Social Desirability)による歪みを受けやすいからである。この点から、今後は、社会的望ましきによる歪みの混入しない、野外実験(field experiment)などの手法によって、本研究の知見を追試してゆく必要があるだろう。

注1 加藤(住み心地要因の分析)の目的参照

注2 松井・堀(1979)では、非干渉の規範と命名されているが、内容はMilgram(1970)の非関与の規範と一致しており、本論文では後者の名称を使用する。

注3 これら3項目に加えて、非干渉の規範の項目として、「他人の家庭の事には口だししない方がよい」の項目が含まれているが、内容的に①と重複するので、本報告では割愛した。なお、本調査の結果によると、この項目は①とほぼ同じ方向で、他の項目と関連している。

文献一覽

西川正之・高木修・工藤力・坂口哲司

- 1978 「社会的支援行動の研究(2)——援助者の性別、援助者と被援助者の性別関係、及びコストの高低が援助行動に及ぼす影響(伝言応諾行動——)」『日本グループ・ダイナミクス学会第26回大会発表論文集』

松井豊

- 1978 「大学生における援助行動の研究——規範意識の検討から——」東京都立大学修士論文

松井豊・石毛晶子

- 1978 「想定場面を用いた援助行動の研究(1)——援助者の性及び性格特性の要因について——」『日本社会心理学会第19回大会発表論文集』
- 1979 「想定場面を用いた援助行動の研究(2)——構造的分析——」『日本社会心理学会第20回大会発表論文集』

松井豊・嶋村美奈子

- 1980 「援助行動に及ぼす状況的要因の影響(その3) 課題の達成志向性と傍観者効果について」『日本グループ・ダイナミクス学会第28回大会発表論文集』

松井豊・堀洋道

- 1978 「大学生の援助に関する規範意識の検討(その1)」『日本心理学会第42回大会発表論文集』
- 1979 「大学生の援助に関する規範意識の検討(その2)」『日本心理学会第43回大会発表論文集』

Baron, R. A.

- 1978 "Invasions of personal space and helping: mediating effects of invader's apparent need." *Journal of Experimental Social Psychology*, 14, 304—312

Baron, R. A. & Bell, P. A.

- 1976 "Physical distance and helping: some unexpected benefits of 'Crowding in' on others." *Journal of Applied Social Psychology*, 6, 95—104.

Bar-Tal, D.

- 1976 *Prosocial Behavior: A Halsted Press*

Bickman, L., Teger, A., Gabriele, T., McLaughlin, C., Berger, M., & Sunaday, E.

- 1973 "Dormitory density and helping behavior." *Environment and Behavior*, 5, 465—490.

Darley, J. & Batson, D.

- 1973 " 'From Jerusalem to Jericho': a study of situational and dispositional variables in helping behavior." *Journal of Personality & Social Psychology*, 27, 100—108.

Forbes, G. B. & Gromoll, H. F.

- 1971 "The lost letter technique as a measure of social variables: some exploratory findings." *Social Forces*, 50, 113—115.

Franklin, B. J.

- 1974 "Victim characteristics and helping behavior in a rural southern setting." *Journal of Social Psychology*, 93, 93—100.

Gelfand, D., Hartmann, D., Walder, P., & Page, B.

- 1973 "Who reports shoplifters? a field-experimental study." *Journal of Personality & Social Psychology*, 25, 276—285.

House, J. S. & Wolf, S.

- 1978 "Effects of urban residence on interpersonal trust and helping behavior." *Journal of Personality & Social Psychology*, 36, 1029—1043.

Jorgenson, D. O. & Dukes, F. O.

- 1976 "Deindividuation as a function of density and group membership." *Journal of Personality & Social Psychology*, 34, 24—29.

Kammann, R., Thomson, R., Irwin, R.

- 1979 "Unhelpful behavior in the street : city size or immediate pedestrian density?" *Environment & Behavior*, 11, 245—250.
- Konečni, V. J., Libuser, L., Morton, H., & Ebbesen, E. B.
1975 "Effects of violation of personal space on escape and helping responses." *Journal of Experimental Social Psychology*, 11, 288—299.
- Korte, C.
1978 "Helpfulness in the urban environment." pp. 85—109 in Baum, A., Singer, J. E., & Valin, S (eds), *Advances in Environmental Psychology* : LEA.
- Korte, G. & Kerr, N.
1975 "Response to altruistic opportunities in urban and nonurban settings" *Journal of Social Psychology*, 95, 183—184.
- Korte, C., Ypma, & Toppen, A.
1975 "Helpfulness in Dutch society as a function of urbanization and environmental input level" *Journal of Personality and Social Psychology*. 32, 996—1003.
- Latané, B. & Darley, D.
1970 *The Unresponsive Bystander : Why Doesn't He Help?* Apperleton-Century-Crofts
- Lesk, S. & Zippel, B.
1975 "Dependency, threat, and helping in a large city." *Journal of Social Psychology*. 95, 185—186.
- Lowe, R. & Ritchey, G.
1973 "Relation of altruism to age, social class, and ethnic identity." *Psychological Reports* 33, 567—572.
- Mathews, K. & Canon, L. K.
1975 "Environmental noise level as a determinant of helping behavior" *Journal of Personality & Social Psychology*. 32, 571—577.
- Merrens, M. R.
1973 "Nonemergency helping behavior in various sized communities" *Journal of Social Psychology*. 90, 327—328.
- Milgram, S.
1970 "The experience of living in cities —adaptations to urban overload create characteristic qualities of city life that can be measured" *Science*, 13 March
- Page, R. A.
1977 "Noise and helping behavior" *Environment and Behavior*. 9, 311—334.
- Schwartz, S. H. & Clausen, G. T.
1970 "Responsibility, norms, and helping in an emergency" *Journal of Personality & Social Psychology*, 16, 299—310.
- Sherrod, D. & Downs, R.
1974 "Environmental determinants of altruism : the effects of stimulus overload and perceived control on helping," *Journal of Experimental Social Psychology*. 10, 468—479
- Weiner, F.
1976 "Altruism, ambiance, and action : The effect of rural and urban rearing on helping behavior" *Journal of Social Psychology*, 34, 112—124.

Psychological Traits of Apartment House Residents

—An analysis of residential environment, helping behaviour and norm senses of helping—

Noriaki Kato* and Yutaka Matsui**

*Center for Urban Tokyo Metropolitan University

**The Faculty of Humanities, Tokyo Metropolitan University

The aim of this study is to make clear which factors of residential environment influence helping behaviour and norm of senses helping. Surveys of residents living in Tama New town, Naze and Aoyama were done. The respondents were living in apartment houses and detached houses. Analysis of the responses given by 658 housewives revealed the following information.

1. Residents of Naze (a non-urban area) were more generous and had less non-involvement norms than those of Tama (a suburb of Tokyo) and Aoyama (a town in Tokyo).
2. Norms of non-involvement inhibited helping behaviour.
3. Structure of resident house and respondents' feeling of safety in the community had no influence on helping behaviour. But, respondents who sensed a high rate crime occurrences in the community had more norm senses of non-involvement.